

# 社会環境の急速な変化が与える

## 人々への心理的影響

### —関係流動性の変化に注目して—

加藤友和

現在の日本社会環境は人やモノ、情報がどんどん入れ替わっていく社会に急速に変化してきている。人々はこの急速な変化にうまくついていけないのではないか。本研究の目的は、このような社会的変革の中に置かれた人々の心理にはどのような影響が生じているのかを明らかにすることである。

山岸（1998, 1999, 2008; Yamagishi & Yamagishi 1994）はこの社会環境の変化を、安心と信頼の概念を用いて、安心社会から信頼社会へ移行が進んでいると説明している。しかし、現在の日本社会は、都市への人口移動や地方の人口減少などによって、都会はより信頼社会に、地方はより安心社会になっていっているだろう。山岸の議論の中では、その社会的変革の中で「社会的移行による戸惑い」「将来への不安」「人間関係での利潤追求を悪に感じる」「世の中の情報をうまく処理できない」「一般的信頼の程度に差が生じる」「社会的移行による心理的ストレス」という6つの心理的弊害が生じると指摘している。しかし、これらの指摘には実証的な根拠が欠けているため、本研究でその例示を目指す。そこで、転居した人は社会的変革を一瞬にして体験したサンプルであり、転居によって関係流動性が大きくなった人は、日本の社会的変革とリンクしていると考えられることから、転居者に注目して調査を行った。

調査は大東文化大学の学生227名を対象に質問紙法を用いて行った。質問紙では、基本的属性と大学入学前後の関係流動性、6つの心理的弊害を感じる程度について尋ねた。

その結果、高関係流動性へ転居した人と転居していない人の間で、あまり回答に有意な差は見られなかった。そして、6つの心理的弊害と関係流動性の変化値との関連性も見られなかった。この結果からは、社会的変革と、6つの心理的弊害との関係については明らかにならなかった。この原因としては、あくまで擬似的なサンプルのみを用いたことが考えられる。ただ、心理的弊害同士の相関分析を行った際に、それらの関連性が見られた。よって、6つの心理的弊害同士は関連性があったことが明らかになった。この結果は、山岸の社会的変革と心理的影響に関する議論を一部支持しているのではないだろうか。そのため本研究は、山岸の議論の全てを否定するものではない。